

## 無著における *Buddhānusr̥ti* について

合 田 秀 行

### 序

瑜伽行唯識派の大成者である無著 (Asaṅga, c. 395-470) には、チベット大蔵經中に未検討の数篇のテキスト<sup>1)</sup>が存しており、いずれも小部でその内容は具体的実践に関わるものが多い。本論考ではその中の『仏随念註』<sup>2)</sup>を中心に取り上げるが、このテキストはチベット訳しか現存せず、無著がこのような著作を残したという記述は、他の関連文献からも確認不可能であるから、当然その著者問題も問われねばならない。しかし、現時点ではその真偽を判断するに至っていないため、当面は無著の作として考察を進めることとする。この仏随念 (*Buddhānusr̥ti*) は原始仏教以来、極めて基本的な実践であるが、無著におけるその受容形態を確認するとともに、無著の主要な論書、特に『撰大乘論』彼果智分に於ける仏身の随念に関する論述との比較検討を試み、その実践体系における仏随念の在り方を考察したい。

### 『仏随念註』の概要と諸特徴

『仏随念註』の全容は、冒頭において原始經典以来の定型的表現である「仏の十号」<sup>3)</sup>の引用を踏まえて仏随念に対する総括的意義付けがなされ、それに続いて十号の各々について註解を施すという構成である。それでは、その総括的意義を確認し、続く註解の中から無著註の特徴の指摘する。

最初に仏随念について、以下のように示されている。

「功德の大自性の門より (*yon tan gyi bdag ñid che baḥi sgo nas*)、諸如来に (*de bḥin gḥegs pa r̥nams la*) 淨信を生じる (*daṅ ba bskyed pa*) ために、最初に共通の (*thun moṅ gi*) 仏随念を説くのである。第二に最勝なる衆生の利益を (*mchog tu sems can gyi don*) なして成就の方法を (*sgrub paḥi thabs*) 説くために、まさに諸薩の特殊な (*thun moṅ ma yin pa*) [仏随念を説くのである]。』<sup>4)</sup>

ここに示されるような如来の具有する自性への信を確立することを目的とする

仏随念は、原始經典以来の基本構造であるが、無著に帰せられる論書あるいは無著に深く関連すると見做される論書でも同様の位置付けを見出し得る。例えば後述する『撰大乘論』における仏身の随念の中でもこの点が明示されている。また『大乘莊嚴經論』にも、十八種の作意 (manasikāra) の第四に挙げられた信安 (adhimukti-niveśaka) 作意が、仏随念と共に起こる (sahagata) と述べられている<sup>5)</sup>。

さらにこの『仏随念註』において鍵概念となるのが、〈説示の成就〉 (ston pa phun sum tshogs pa) であり、これは各号の註解においてはほぼ共通に用いられている。すべてに互って言及するだけの紙幅はないので、最初の「如来・阿羅漢・正等覺者」に關説した部分のみを引用する。

「如来・阿羅漢・正等覺者という諸句によって (tshig rnam kyis) 説示の成就を説く。また説示の成就は二種類あり、[その二種類とは] 説示の相 (ston paḥi mtshan ṅid) と証得の相 (thugs su chud paḥi mtshan ṅid) とである。また説示は顛倒なく (phyin ci ma log par) 示すからであり、それにより世尊が如来と呼ばれるのは、このように顛倒なく法を示すという意味である。さらに証得は二種類あり、[その二種類とは] 断滅 (spaṅs pa) の証得と智慧 (ye śes) の証得とである。断滅を成就して具足することにより世尊と呼ばれる。煩惱 (ñon moṅs) という敵を (dgra) 征服することで (hjom pas) 阿羅漢と呼ばれる。またあらゆる不善の法を滅するから、智慧を成就し具足することで、正等覺者と呼ばれる」<sup>6)</sup>

このように各号の語義的解釈も取り入れつつ、〈説示の成就〉には言葉を媒介として無顛倒に正しく法が説き示される側面と、実際に自らにおいて修習しその法を体得する側面とがあると明示される。つまり他者への説示と、説示した法自体の自己における具現という両面からこの概念を規定するのである。後者についてはさらに煩惱の断滅と智慧の獲得とに二分され、上述のあらゆる説示の側面において完成に導くことが仏の徳性とされる。またこの点で声聞・独覺の二乗と外道とに対して優位性を持つと強調する。この〈説示の成就〉の二種の在り方に関しても、『大乘莊嚴經論』<sup>7)</sup> 『俱舎論』<sup>8)</sup>等に類似した論述が見出される。

上述の〈説示の成就〉という概念は、本註の全体を貫く特徴として指摘したが、十号に対する各註解はいかなる特徴を指摘し得るであろうか。勿論、一々については言及できないが、いくつかの号は原始經典以来の伝統的な語義説明を踏襲していることは事実である。その中であって、他の無著の諸論書との関連から敢えて指摘したいのは、仏陀 (saṅs rgyas) の号に対するコメントである。以下にその一部を引用する。

「一切法の共相 (spyiḥi mtshan űid) と自相 (raṅ gi mtshan űid) とを証得することによって仏陀である」<sup>9)</sup>

これは仏陀における悟りの特質を形容する一表現として挙げられており、極めて簡潔ながら、筆者が別の機会に指摘してきた無著における禪定の究極的な所縁觀を規定する際に用いられる〈総法〉(saṃbhinnadharmā)あるいは〈総縁〉(saṃbhinnālabhāna)の概念とも関連する。これに関しては別の機会に論じ尽くしたのでその詳細は割愛する<sup>10)</sup>。

さらに各号の註解に見られる諸特徴も列挙したいが、紙幅の制約もあり、『仏隨念註』全体を貫く特徴と、無著の修習論において看過できない〈共相〉に関する記述との指摘のみに留めておく。

### 『撰大乘論』における仏隨念との比較検討

無著の主著と見做される『撰大乘論』では、その最終章、玄奘訳の「彼果智分」において仏身に対する隨念を七種の視点から論述している<sup>11)</sup>。要点のみ列記すると、諸如来における①自在 (dbaṅ sgyur ba)、②常住 (rtag pa)、③無過失 (kha na ma tho ba mi mñah)、④無功用 (lhun gyis grub pa)、⑤大享受 (loṅs spyod chen po)、⑥不染汚 (gos pa med pa)、⑦大事 (don chen po)の成就という諸徳をもって仏隨念を修すべきことが説かれる。これらに関して逐一検討する余地はないが、既に指摘した如く、『仏隨念註』においても①自在、③無過失、そして⑦大事の成就についてはほぼ等しく論述されていた。若干補足すると、『撰大乘論』では〈自在〉の根拠として無礙なる神通力の獲得が説かれているが、この神通力について『仏隨念註』では明行足の箇所詳述されている<sup>12)</sup>。次に、〈無過失〉についても、煩惱障と所知障とをすべて断滅していることと定義されているが、これも仏・世尊の註解で明示されている<sup>13)</sup>。さらに〈大事〉とは利他行であり、正等覺・完全なる涅槃を示現すること (kun tu ston pa) などにより衆生を解脱に導くことと解釈され、まさに『仏隨念註』の特徴である〈説示の成就〉と合致する内容である。逆に七種の中でまったく『仏隨念註』に見出せないのは、仏身の〈常住〉と、無著の修習論において重要な概念であり諸論書で多用されている〈無功用〉に限られる。

### 結 論

以上、無著の作と伝えられるチベット訳『仏隨念註』について、その諸特徴を

概観すると同時に、関連する諸文献、特に『撰大乘論』との比較検討を試みてきた。その結果、仏随念の在り方を巡って、『撰大乘論』の場合、仏の称号としては天尊や如来などの表現に限定されて、唯識派の法身説に集約させた形態によって仏随念を説き、表面的には十号による仏随念の形態を示していない。しかしながら、仏随念を実践する際の基本的内容を比較検討していくと、多くの点で『仏随念註』の特徴と一致することが確認され、両者に大きな差異は認められず、むしろ関連性を看取することができる。

- 1) 塚本啓祥他編『梵語仏典の研究Ⅲ論書篇』(平楽寺書店、平成2年) p. 356を参照。また昨年、本学会において発表した『禅定灯論』もそれらに含まれる。拙稿「無著造『禅定灯論』における所縁観」(『印度学仏教学研究』第43巻第1号所収)を参照。
- 2) *Saṅs rgyas rjes su dran paḥi ḥgrel pa* (Skt: *Buddhānusmṛti-vṛtti*)、北京版チベット大蔵経(以下ではP.と略称) No. 5482, ŋi, 14a1-18b1; デルゲ版チベット大蔵経(以下ではD.と略称)、No. 3982, ŋi, 11b5-15a6。
- 3) 十号の表現形式に関しては、藤田宏達「仏の称号——十号論」(『玉城康四郎博士還暦記念論集・仏の研究』所収、春秋社、昭和52年)を参照した。
- 4) P. 14a4-5; D. 11b7-12a1. 訳文中の( )内はチベット訳の原語を、また[ ]内は筆者の補足を示す。以下同様。
- 5) 玄奘訳『大乘莊嚴經論』、大正蔵、第31巻、610下; *Mahāyānasūtrālamkāra*, S. Lévi ed., p. 56, 1. 28: *adhimuktiniveśako yo buddhānusmṛtisahagataḥ/*
- 6) P. 14b2-5; D. 12a4-7.
- 7) 玄奘訳『大乘莊嚴經論』、大正蔵、第31巻、619上; *Mahāyānasūtrālamkāra*, S. Lévi ed., p. 77, 1. 22-p. 78, 1. 11.
- 8) 玄奘訳『阿毘達磨俱舍論』、大正蔵、第29巻、156中; 以下に梵文から当該箇所を訳出する。「教主の正法は二種であって、阿含と証得とを本質としている (*āgamādhigamātmaka*)。この中で阿含とは経律論であり、証得とは菩提分である」*Abhidharmakośabhāṣya*, Pradhan ed., p. 459, 11. 9-10.
- 9) P. 18a2-3; D. 15a1-2.
- 10) 拙稿「無著における実践構造の一視点」(『仏教学』第35号所収、山喜房仏書林、平成5年)等において、詳述したので参照されたい。
- 11) P. No. 5549, li, 47b3ff.; D. No. 4048, ri, 40b4ff.
- 12) P. 15b1ff.; D. 15a1ff.
- 13) */bcom ldan ḥdas źes bya ba yaṅ ñon moṅs pa daṅ/śes byaḥi sgrib paḥi tshogs spaṅs nas blo rgyas pas na saṅs rgyas źes byaḥo/* P. 18a4; D. 15a3.

(本稿は、平成7年度文部省科学研究費奨励研究による研究成果の一部である。)

〈キーワード〉 無著、『仏随念註』、十号

(東方研究会専任研究員)